

1.7 [木]	第588回 サントリーホール名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 The 588th Suntory Hall Popular Series Thursday, 7th January, 19:00 / Suntory Hall
1.9 [土]	第183回 東京芸術劇場マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 The 183rd Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series Saturday, 9th January, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／ミハエル・ボーダー Conductor MICHAEL BODER P.8

ハープ／グザヴィエ・ドウ・メストレ Harp XAVIER DE MAISTRE P.11

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ワーグナー 楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉
第1幕への前奏曲 [約9分] P.12
WAGNER / “Die Meistersinger von Nürnberg”, Prelude to Act I

ヒナステラ ハープ協奏曲 作品25 [約23分] P.13
GINASTERA / Harp Concerto, op. 25
I. Allegro giusto
II. Molto moderato
III. Cadenza. Liberamente capriccioso – Vivace

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] P.14
DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 “From the New World”
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社 (1/7)
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)
[事業提携] 東京芸術劇場 (1/9)
〈サントリーホール30周年記念参加公演〉(1/7)



1.14 [木]	第554回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 The 554th Subscription Concert Thursday, 14th January, 19:00 / Suntory Hall
----------	---

指揮／ミハエル・ボーダー Conductor MICHAEL BODER P.8

ピアノ／フランチェスコ・ピエモンテージ
Piano FRANCESCO PIEMONTESE P.11

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

R. シュトラウス 交響詩〈ドン・ファン〉 作品20 [約17分] P.15
R. STRAUSS / Don Juan, op. 20

リスト ピアノ協奏曲 第2番 イ長調 [約21分] P.16
LISZT / Piano Concerto No. 2 in A major
I. Adagio sostenuto assai – II. Allegro agitato assai
– III. Allegro moderato – IV. Allegro deciso
– V. Marziale un poco meno allegro – VI. Allegro animato

[休憩 Intermission]

ツェムリンスキー 交響詩〈人魚姫〉 [約40分] P.17
ZEMLINSKY / Die Seejungfrau
I. Sehr mässig bewegt
II. Sehr bewegt, rauschend
III. Sehr gedehnt, mit schmerzvollem Ausdruck

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)
[協力] アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社)
〈サントリーホール30周年記念参加公演〉



1.21 [木]	特別演奏会《究極のブルックナー》 東京芸術劇場コンサートホール／19時開演 Special Concert Thursday, 21st January, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
1.23 [土]	特別演奏会《究極のブルックナー》 東京オペラシティ コンサートホール／14時開演 Special Concert Saturday, 23rd January, 14:00 / Tokyo Opera City Concert Hall

1.25 [月]	オービック・スペシャル・コンサート2016 名曲シリーズ 福岡公演 福岡シンフォニーホール／19時開演 OBIC Special Concert 2016 Popular Series in Fukuoka Monday, 25th January, 19:00 / Fukuoka Symphony Hall
----------	--

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

指揮／小林研一郎（特別客演指揮者） Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI

ヴァイオリン／木嶋真優 Violin MAYU KISHIMA

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

モーツァルト 歌劇〈フィガロの結婚〉序曲 [約4分]
MOZART / “Le nozze di Figaro”, Overture

ブルッフ ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品26 [約24分]
BRUCH / Violin Concerto No. 1 in G minor, op. 26

- I. Allegro moderato
- II. Adagio
- III. Allegro energico

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉 [約47分]
BEETHOVEN / Symphony No. 3 in E flat major, op. 55 “Eroica”

- I. Allegro con brio
- II. Marcia funebre. Adagio assai
- III. Scherzo. Allegro vivace
- IV. Finale. Allegro molto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、FBS 福岡放送、読売日本交響楽団
[共催] (公財) アクロス福岡
[協賛] 株式会社オービック
[後援] 福岡市、福岡市教育委員会
[協力] 北九州・筑豊京築・福岡東部・福岡西部・福岡南部・筑後各読売会

指揮／スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ（桂冠名誉指揮者）
Honorary Conductor Laureate STANISLAW SKROWACZEWSKI P.9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ブルックナー 交響曲 第8番 ハ短調 [約82分] P.19
BRUCKNER / Symphony No. 8 in C minor

- I. Allegro moderato
- II. Scherzo. Allegro moderato
- III. Adagio. Feierlich langsam, doch nicht schleppend
- IV. Finale. Feierlich nicht schnell

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[事業提携] 東京芸術劇場 (1/21)

※1月21日公演はNHKによるテレビ収録が行われます。

1.27 [水]

第9回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール／19時30分開演(19時から解説)
The 9th Yomikyo Ensemble Series Wednesday, 27th January, 19:30
(Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《小山実稚恵×読響の室内楽》

ピアノ／小山実稚恵 Piano MICHIE KOYAMA

ヴァイオリン／小森谷巧 長原幸太 (読響コンサートマスター)
Violin TAKUMI KOMORIYA KOTA NAGAHARA

ヴィオラ／鈴木康浩 (読響ソロ・ヴィオラ) Viola YASUHIRO SUZUKI

チェロ／毛利伯郎 (元読響ソロ・チェロ) Cello HAKURO MORI

コントラバス／石川 滋 (読響ソロ・コントラバス) Double Bass SHIGERU ISHIKAWA

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社メディア局編集委員)
Navigator MISHIO SUZUKI

シューマン ピアノ五重奏曲 変ホ長調 作品44 [約30分]
SCHUMANN / Piano Quintet in E flat major, op. 44

- I. Allegro brillante
- II. In modo d'una marcia. Un poco largamente
- III. Scherzo. Molto vivace
- IV. Allegro ma non troppo

[休憩 Intermission]

シューベルト ピアノ五重奏曲 イ長調 D667 〈ます〉 [約40分]
SCHUBERT / Piano Quintet in A major, D667 "Die Forelle"

- I. Allegro vivace
- II. Andante
- III. Scherzo. Presto
- IV. Tema con variazioni. Andantino
- V. Allegro giusto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

1.29 [金]

第12回 読響カレッジ
文京シビックホール／20時開演(19時30分から解説)
The 12th Yomikyo College
Friday, 29th January, 20:00 (Pre-concert talks from 19:30) / Bunkyo Civic Hall

指揮／下野竜也 (首席客演指揮者) Principal Guest Conductor TATSUYA SHIMONO P.10

ナビゲーター／中井美穂 Navigator MIHO NAKAI

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

チャイコフスキー 交響曲 第6番 ロ短調 作品74 〈悲愴〉 [約46分] P.21
TCHAIKOVSKY / Symphony No. 6 in B minor, op. 74 "Pathétique"

- I. Adagio - Allegro non troppo
- II. Allegro con grazia
- III. Allegro molto vivace
- IV. Finale. Adagio lamentoso



ナビゲーター
中井美穂 Miho Nakai

アナウンサー。
ロサンゼルス生まれ。1987～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。現在、「タカラヅカ・カフェブレイク」(TOKYO MXテレビ)、「松任谷正隆のディアパートナー」(FM東京)、舞台「スジナシBLITZシアター」にレギュラー出演。97年から「世界陸上」(TBS)のメインキャスターを務める。演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートのナビゲーター・朗読も行っている。2013年から読売演劇大賞選考委員を務める。

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[共催] 文京シビックホール(公益財団法人文京アカデミー)

ミヒャエル・ボーダー

Michael Boder

オペラとコンサートで活躍
定評あるドイツの名匠
読響に初登場

ハンプルクとフィレンツェで学び、フランクフルト歌劇場でギーレンのアシスタントを務めた後、欧州各地の劇場で経験を積んだ。パーゼル歌劇場の音楽総監督を経て、2008～12年にバルセロナ・リセウ大歌劇場の音楽監督を務めた。現在はデンマーク王立歌劇場の首席指揮者兼アーティスティック・アドバイザー。

今までにミュンヘン、ケルン、チューリヒ、ベルリン、ロンドンなどで、モーツァルト、ヴェルディ、プッチーニのほか、ワーグナーの〈指環〉4部作など多数の作品を手掛け、ベルク、シェーンベルクらの新ウィーン楽派や現代作品も得意としている。日本では新国立劇場で〈フィデリオ〉〈さまよえるオランダ人〉を指揮した。

最近ではウィーン国立歌劇場で〈エレクトラ〉、デンマーク王立歌劇場で



©Alexander Vasiljev

〈ルル〉〈ばらの騎士〉〈サロメ〉〈影のない女〉、ブリュッセルのモネ歌劇場でリゲティの〈グラン・マカーブル〉などを振った。また、オーケストラ指揮者としても定評があり、ベルリン・フィル、アンサンブル・モデルン、ウィーン放送響、ウィーン響などに定期的に客演。今年はデンマーク王立管とシェーンベルクの〈期待〉(演奏会形式)、モネ歌劇場管とマーラーの〈子供の不思議な角笛〉などで好評を博した。

読響とは今回が初共演となる。

- ◇1月7日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇1月9日 東京芸術劇場マチネーシリーズ
- ◇1月14日 定期演奏会

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ

(桂冠名誉指揮者)

Stanislaw Skrowaczewski

92歳を迎えた現役巨匠
待望の来日で
至芸を聴かせる

2007～10年、読響の第8代常任指揮者を務め、現在は桂冠名誉指揮者。数々の名演で、聴衆からも熱狂的に支持され、楽団員からも尊敬を集めている92歳のマエストロが、ブルックナーの交響曲第8番で至芸を聴かせてくれる。

1923年ポーランドのリヴォフ(現在はウクライナ領)生まれ。第2次大戦後、奨学金を受けて2年間フランスに留学し、西側に出ることが困難な時代にパリで作曲を学んだ。

40年代後半からポーランド各地のオーケストラの指揮者や音楽監督を歴任し、56年にはローマの国際指揮者コンクールで優勝した。クリーヴランド管を指揮した58年のアメリカ・デビュー以降、アメリカ各地のオーケストラに客演し、60年から20年近くにわたってミネソタ管の音楽監督を務めた。その後は



©読響

ワルシャワ・フィル首席指揮者、英国ハレ管の首席指揮者を務め、現在はミネソタ管の桂冠指揮者のほか、ザールブリュッケン・カイザースラウテルン・ドイツ放送フィルの桂冠指揮者の地位にある。アメリカ国籍を得て、ミネアポリスを拠点に世界各地で活躍している。

世界的ヒットとなったブルックナーの交響曲全集など、録音も数多い。読響とも多くのCDをリリースしており、昨年には最新盤となる「ブルックナー／交響曲第0番」が発売された。

◇1月21日、23日 特別演奏会《究極のブルックナー》

下野 竜也

(首席客演指揮者)

Tatsuya Shimono

読響と歩んできた俊英
チャイコフスキーの
傑作に挑む

2006年11月から13年3月まで読響の初代正指揮者を務め、現在は首席客演指揮者。古典から現代まで幅広いレパートリーと独自の選曲で話題を呼ぶ俊英が、今月はチャイコフスキー晩年の傑作、交響曲第6番〈悲愴〉に読響とは初めて挑戦する。

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室、イタリア・シエナのキジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィルの指揮研究員となり朝比奈隆氏ら巨匠たちの薫陶を受けた。文化庁派遣芸術家在外研修員としてウィーン国立演劇音楽大学に留学中、2000年の東京国際音楽コンクールと01年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送



©読響

響、ローマ・サンタチェチーリア管などと共演し、国際的に活躍するほか、上野学園大学教授として後進の指導に当たっている。また、出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励賞など受賞も数多い。14年9月には読響とカレル・フサの〈この地球を神と崇める〉(管弦楽版)を日本初演し、読響をミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞に導いた。

◇ 1月29日 読響カレッジ

A rtist of the month

今月のアーティスト



©Udo Titz

ハープ グザヴィエ・ドゥ・メストレ

Harp Xavier de Maistre

フランス・トゥーロン生まれ。9歳からハープを学び、世界の主要なコンクールで数々の賞を受賞して注目を浴びた。バイエルン放送響のソロ奏者を経て1998年、25歳でウィーン・フィルのソロ奏者に就任した。

2010年に同フィルを退団後はソリストとして活躍し、イスラエル・フィル、バイエルン放送響など多くのオーケストラと共演するほか、ザルツブルク音楽祭など欧米の主要な音楽祭から招かれている。またソニー・BMGの専属アーティストとして多数のCDを出している。

今回が読響初登場。

◇ 1月7日 サントリーホール名曲シリーズ
◇ 1月9日 東京芸術劇場マチネーシリーズ



©Julien Mignot

ピアノ フランチェスコ・ピエモンテージ

Piano Francesco Piemontesi

1983年スイス生まれ。ブレンデルやペライア、内田光子らの薫陶を受け、2007年にエリザベート王妃国際コンクールで3位に入賞して注目を集めた。今までにバイエルン放送響、バーミンガム市響、ベルリン放送響などと共演。ルツェルン音楽祭やルール・ピアノ・フェスティバル、ラ・ロック・ダンテロンなど欧州の著名な音楽祭に出演し、室内楽でバシュメット、ルノー&ゴータイエ・カプソン、エマニュエル・パユらと共演した。またフランスのNaïveレーベルなどからCDを多数リリースしている。

今回が読響初登場。

◇ 1月14日 定期演奏会

1.7 [木]

1.9 [土]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

ワーグナー

楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉第1幕への前奏曲

作曲：1867年完成／初演：1868年6月21日、ミュンヘン（オペラ全曲）／演奏時間：約9分

国民芸術の栄光を讃える

文学に熱中した少年時代を過ごしたリヒャルト・ワーグナー（1813～83）は、ドイツの中世の叙事詩や物語、神話を題材としたオペラの創作を目指し、〈タンホイザー〉や〈ローエングリン〉などを作曲した。また、オペラをさらに発展させ、音楽、演劇、文学、美術などの「諸芸術の総合（総合芸術）」を目指し、〈トリスタンとイゾルデ〉以降の作品は「楽劇」と呼ばれている。

〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉は1867年に完成。台本も、ワーグナーがみずから書き上げた。主人公は、靴職人のハンス・ザックスで、舞台は16世紀ドイツのニュルンベルク。マイスター（職人の親方）たちが集う歌合戦

をめぐる物語である。この楽劇のなかで、ワーグナーは規則ずくめの形式主義を批判し、自由な創造性を讃え（^{たた}）るとともに、ドイツの国民芸術の栄光を賛美している。この楽劇は3幕構成であるが、ここで演奏されるのは第1幕への前奏曲。楽劇のなかで用いられるライトモチーフ（示導動機）が現れ、作品全体の要素がみっちり詰まっている。

全体を通して、全音階的な和音の語法や対位法が用いられており、とりわけ、フーガ書法によって規則ずくめの役人を（^や）揶揄している。この作品では、ワーグナー特有の半音階よりも、力強く堂々とした三和音が重要な表現の要素となっている。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、ハープ、弦五部

ヒナステラ ハープ協奏曲 作品25

作曲：1965年／初演：1965年2月18日、フィラデルフィア／演奏時間：約23分

斬新な様式をリズム表現が彩る

ブエノスアイレス出身のアルベルト・ヒナステラ（1916～83）は、ピアソラとともに20世紀アルゼンチンを代表する音楽家である。アルベルト・ウィリアムス音楽院とブエノスアイレス国立音楽院に学んだ。初期の作品では、南米の民族的な音楽をとり入れた表現も手掛けたが、20世紀ヨーロッパの斬新な音楽様式による作風に転じ、さらには12音音楽も試みている。

ハープ協奏曲は、フィラデルフィア管弦楽団のハープ奏者エドナ・フィリップスの委嘱を受けて作曲された。本来は、1958年にワシントンで開催される第1回アメリカ音楽祭で演奏されるはずであったが、作曲が間に合わず、完成したのは1965年であった。作品はその年のうちに、ニカノール・サバレタのハープ独奏と、ユージン・オーマンディの指揮、そしてフィラデルフィア管弦楽団によって初演された。

この作品は、とりわけ第1楽章などでストラヴィンスキーやバルトークから影響を受けたリズム表現が大きな特徴である。また、さまざまな打楽器が

用いられており、とりわけチェレスタは重要な役割を担っている。

第1楽章 アレグロ・ジュスト 4分の3拍子（8分の6拍子）。管打楽器の和音と弦楽器のピッツィカートが印象的な前奏に導かれ、ハープが第1主題を提示。音楽は、モチーフの反復やシンクローションのリズムなどに彩られる。ソナタ形式に基づいており、第2主題はハープによる叙情的な楽想。

第2楽章 モルト・モデラート 8分の6拍子。前奏部では、^{めいそう}瞑想的な主題をコントラバス、チェロ、ヴィオラ、そしてその反行形を第1ヴァイオリンが模倣してゆく。つづいてハープが新たな主題を表わす。対位法的な書法が特徴の緩徐楽章。チェレスタを伴奏にハープが奏でる歌曲のような旋律は、心に残る。

第3楽章 カデンツァ、リベラメンテ・カプリッチョーソ〜ヴィヴァーチェ。ハープによる壮麗なカデンツァで音楽は始まる。ハープが奏でる主題やそのモチーフに、オーケストラが応答する表現が印象的。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器（タムリン、銅鑼、クロティル、クラベス、ウッドブロック、小太鼓、大太鼓、ギロ、テナードラム、ムチ、マラカス、シロフォン、グロックンシュピール、トライアングル、トムトム、カウベル、サスペンデッド・シンバル、ボンゴ）、チェレスタ、弦五部、独奏ハープ

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

作曲：1893年完成／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

新天地で郷愁の念を歌う

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、チェコの国民楽派を代表する作曲家。プラハのオルガン学校を卒業後、1862年にプラハの国民仮劇場にヴィオラ奏者として入団。ここで同楽団の指揮者として就任したベドルジハ・スメタナと知り合い、彼を通してチェコの国民音楽の重要性を認識した。また、ドヴォルザークが作曲した〈スラヴ舞曲集〉（全2集）は、彼の名をヨーロッパに広く知らしめた。

ドヴォルザークの交響曲のなかでも、第9番は〈新世界から〉の名で親しまれている。プラハを拠点に活動していた彼は、ニューヨークのナショナル音楽院からの院長就任の依頼を受け、1892年に渡米。アメリカで彼は、黒人やネイティブ・アメリカンと接し、彼らの音楽にも強い関心を持った。その一方で、新天地アメリカでホームシックにかかったとされる。音楽院での指導の合間を縫って、彼はアイオワ州スビルヴィルのチェコの入植者の住む地域をしばしば訪れ、郷愁を強くし

た。この交響曲には、祖国チェコへの望郷の念や、アメリカへの思いが込められている。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モルト ホ短調。弦楽器によるゆっくりとした序奏に続き、主部ではホルンやオーボエが第1主題を奏でる。この第1主題は、作品全体をまとめる象徴的な意味を担っている。

第2楽章 ラルゴ 変ニ長調。イングリッシュ・ホルンが歌い上げるノスタルジックな調べは、“家路”のタイトルで知られている。

第3楽章 スケルツォ（モルト・ヴィヴァーチェ） ホ短調。弾むようなスケルツォ楽章で、性格の異なる二つのトリオをはさむ。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ ホ短調。緊迫した序奏ののち、金管楽器が第1主題を鳴り響かせる。ソナタ形式に基づいており、第2主題をクラリネットが郷愁の念を込めて歌い上げる。また、前の三つの楽章で用いられた主題も回帰し、壮大なクライマックスを形成する。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

1.14 [木]

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

R. シュトラウス 交響詩〈ドン・ファン〉 作品20

作曲：1887～88年／初演：1889年11月11日、ワイマール／演奏時間：約17分

理想の女性求める叙情詩題材に

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は、リストが創始した交響詩というジャンルを継承して発展させ、数々の傑作を残した。〈ドン・ファン〉は、その後に続く（〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉〈英雄の生涯〉等の）交響詩の出発点となる作品で、シュトラウス最初の成功作となった。

交響詩とは、オーケストラによる標題音楽の一種で、物語や伝説、情景、詩などから着想を得て書かれた、概ね単一楽章の楽曲である。17世紀スペインの伝説の貴族ドン・ファンは、快楽の本能のおもむくままに、どんな女性でも口説いたとされる希代のプレイボーイ。シュトラウスがここで題材としたのは、ハンガリー生まれのドイツの詩人ニコラウス・レーナウの叙情詩で、理想の女性を追い求めていくものの満

たされず、最後の決闘で傷つき人生を終えるドン・ファンの姿が描かれた。

シュトラウスは、自作の交響詩を語るなかで、単なる描写音楽ではないと強調したように、この作品も、ソナタ形式（展開部を大きく発展させた）の構造のなかで物語が展開される。

音楽は、ドン・ファンの享乐的な衝動を示すかのように、勢いのある導入主題で始まる。やがて弦楽器でドン・ファンの第1主題が力強く現れ、フルートやヴァイオリン独奏などのさまざまな動機と、まるで愛を語り合うかのように絡みながら展開する。楽曲の中間で登場するホルン4本によるドン・ファンの第2主題は、尊大な姿を示す。最後は、激しい情熱の高まりを経て、ドン・ファンが死のひと突きを受けると、音楽も速度を落として静かに終わる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、グロッケンシュピール、シンバル、サスペンデッド・シンバル）、ハーブ、弦五部

リスト ピアノ協奏曲 第2番 イ長調

作曲：1839年（1849～50年、53年、61年改訂）／初演：1857年1月7日、ワイマール／演奏時間：約21分

単一楽章に華麗な技巧ちりばめる

フランツ・リスト（1811～86）は、1839年からの8年間で約1000回の演奏会を開き、音楽史上最高の技巧をもつピアニストとしてヨーロッパを制覇した。今日のリサイタル形式の演奏会を作り上げたのもリストで、それまでのピアニストは自作を演奏するのが一般的だったが、リストは有名なオペラのパラフレーズや歌曲の編曲を数多く手がけた。バッハからベートーヴェン、ショパン、シューマンの作品をレパートリーとして、原則暗譜で演奏したとも伝えられる。多忙な演奏旅行の合間をぬって2曲のピアノ協奏曲の作曲にも着手していたが、どちらも発表には至らなかった。

1847年にリストは、ヴィルトゥオーゾ（超絶技巧）・ピアニストとしての全盛期にその活動を休止し、翌年ワイマールの宮廷楽長に就任した。以後は、指揮と創作活動に専念することになる。ワイマールではこれまでに着手した作品を完成させ、指揮の仕事を通じてオーケストラの経験を積んだ。交響詩を初めて作曲するなど新たな作品

にも意欲的に取り組んだ。ピアノ協奏曲第2番は、都合2回の改訂を経て、1857年に初演され、ピアノ独奏ではなく、リストは指揮者として参加した。その後、さらに改訂の手が加えられ、1863年に決定稿が出版された。

ピアノ協奏曲第2番は、六つの部分が切れ目なく演奏される単一楽章の作品。豊かな詩情に溢れ、夢のように美しい部分と勇壮で激しい部分が交互に現れる。リスト自身が当初は〈交響的協奏曲〉とタイトルをつけたように、ピアノ独奏はオーケストラに溶け込み交響的だが、華麗な演奏技巧もちりばめられている。

ゆるやかな第1部（アダージョ・ソステヌート・アッサイ）開始のクラリネットを中心とした木管楽器による主題が全体を統一し、さまざまに変容される。ロマンティックな第3部（アレグロ・モデラート）は、ピアノとチェロ独奏の対話が美しい。華々しい行進曲を経て、ピアノの目くるめく技巧と力強いオーケストラで堂々と結ばれる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル）、弦五部、独奏ピアノ

ツェムリンスキー 交響詩〈人魚姫〉

作曲：1902～1903年／初演：1905年1月25日、ウィーン／演奏時間：約40分

80年近く埋もれていた傑作

リストが創始した交響詩は、R.シュトラウスによってその頂点が築き上げられた。一方、ウィーン生まれの作曲家アレクサンダー・フォン・ツェムリンスキー（1871～1942）のただひとつの交響詩〈人魚姫〉は、初演の後、80年近くも再演の機会に恵まれず、長らく忘れられていた。

ツェムリンスキーは、13歳でウィーン楽友協会音楽院に入学し、ピアノ科を優秀な成績で卒業後、さらに音楽院院長のフックスのもとで作曲を学んだ。在学中は、学内のコンクールのために作曲中の楽譜のインクが乾く間にピアノの練習をしたというエピソードが伝えられるほど音楽に情熱を傾け、1892年に卒業すると、ブラームスの推薦で音楽活動を開始した。さらにマーラーに認められ、ウィーンのフォルクスオーパーや宮廷歌劇場等の指揮者を歴任するなど、非凡な資質をもった多才な音楽家だった。アルノルト・シェーンベルク（1874～1951）の作曲の師でもあり、その音楽は、マーラーと新ウィーン楽派の橋渡しとして位置づけられている。

3歳年下のシェーンベルクとは、

1894年に指揮者として招かれたウィーンのアマチュア楽団「ポリヒュムニア」で知り合った。ツェムリンスキーによれば、「火のような激しさで、下手くそにチェロをかき鳴らしていた（そうせざるを得ないほど、おんぼろの楽器だった）」のが、若き日のシェーンベルクだった。独学で作曲を学び、習作を書き溜めていたシェーンベルクの並々ならぬ意欲と才能を知ったツェムリンスキーは、彼に多大な影響を与えた。ウィーンの芸術家が集うカフェにこの論争好きの青年を連れて行き、書き上げた作品に推敲の手を加え、発表できる場を取り計らうなど後押しも惜しまなかった。1901年にはツェムリンスキーの妹のマティルデとシェーンベルクが結婚したため、家族としての付き合いもうまれた。

新しい音楽を目指すツェムリンスキーは、1904年にシェーンベルクとともにマーラーを名誉会長に、「ウィーンに同時代の音楽を育成する場を設けること」を目的とする「創造的音楽家協会」を創設した。活動は1シーズンしか続かなかったが、1905年に開か

1.21 [木]

1.23 [土]

堀 朋平 (ほり ともへい)・音楽学者

ブルックナー
交響曲 第8番 ハ短調

作曲：1884年7月着手、第2稿は1891年4月18日に完成／初演：1892年12月13日、ウィーン／演奏時間：約82分

生と死を巡る魂のドラマ

ドナウの大河に沿って開けた中都市
リンツは、中世から高い文化をほこ
る。音楽活動も豊かに営まれていた
が、なんといっても帝都ウィーンから
は西方150キロも離れた地。さらに市
電とバスで南へ1時間……アンスフェ
ルデンという村の貧しい家庭に、アン
トン・ブルックナー（1824～96）は生
まれ育った。ゆうに2人前は平らげた
というその体で、薪わりや雪かき兼任
の（ほとんど農夫に近い）音楽教師と
して生計を立てつつ、近隣にある教会
の大オルガンを弾き鳴らすことで、音
楽家として歩み始めた。

こんな寒村に生まれた朴訥な男が
19世紀の交響曲を頂点にみちびいた
事実には、やはり驚くほかない。オル
ガンの響きと悠久の自然を原風景とし
たその音楽には、大都市（ウィーンや
ライプツィヒ）のシューベルトやシュ
ーマンが見せた焦燥とはまた違う、独

特の時間意識が流れていたのだろう。
やがてもっと自由な環境を求めた作曲
家は、1855年にはリンツ、1868年に
はついにウィーンに移住して教職を歴
任する。

そうして歩みだしたブルックナー
が、ようやく交響曲作曲家としての名
声を確立したのは60歳の折、第7番に
よってだった。1884年にライプツィヒ
で初演されてから世界各地で再演され
話題をさらったこの大成功のなか、同
じ年に第8番は着手されている。老年
にして初めての上げ潮に乗ったわけだ
が、すぐに荒波が襲う。第8番の総譜
を託したミュンヘンの宮廷楽長ヘルマ
ン・レーヴィが、作品を理解できない
といって初演を断ってきたのである。

ワーグナーへの尊敬を共にする15
歳下のレーヴィによる拒絶にはショッ
クを受けたが、第9番作曲の合間を縫
って素早く「第2稿」を書き上げ、こ

れた4回目の演奏会で、〈人魚姫〉は、
シェーンベルクの交響詩〈ペレアスと
メリザンド〉等とともに初演された。
当時の批評によれば、評判は悪くな
ったが、予定されていたベルリンでの
演奏をツェムリンスキーはみずからキ
ャンセルした。その後、演奏されるこ
とはなく、楽譜の所在も不明になって
しまった。

この作品が再び注目されたのは、
1974年のシェーンベルク生誕100年を
きっかけに、ツェムリンスキーの音楽
への再評価と研究がなされてからであ
る。紛失したとされていたが、未出版
の楽譜のなかから〈人魚姫〉のスコア
が発見され、1978年にペーター・ギュ
ルケ指揮のオーストリア・ユース・フ
ィルハーモニーによって蘇演された。

〈人魚姫〉は、アンデルセンの同名
の童話に基づくオーケストラのための
ファンタジーである。後期ロマン派の
爛熟ともいえるこの音楽は、作曲当
初の段階では、物語の筋書きに沿った
2楽章で計画されたが、最終的には人
魚姫が海の泡と化す最後の部分を独立
させた3楽章構成となった。2台のハ
ープを含む、R.シュトラウスの交響
詩に匹敵する大編成の管弦楽で、特に
最初の二つの楽章は、物語を丁寧に音
楽で描いている。

第1楽章（適度にゆるやかに）深い
海の底を描写した主題が弱音で始ま
る。やがてヴァイオリン独奏がどこか
哀しげな人魚姫の主題（楽曲全体で何
度も現れる）を奏でる。次第にその音
楽は力強さを増し、ヴァイオリン独奏
とチェロ独奏の優しい二重奏は人魚姫
の姉妹の対話を思わせる。嵐の描写の
場面では、暗く激しい海の主題がうね
りを上げて押し寄せ、王子の乗る船に
襲いかかる。難破した船から人魚姫は
王子を救い出し、恋心を抱く。その幸
せそうな表情が甘く美しい。

第2楽章（大きく動いて、ざわめくよ
うに）導入部分で人魚姫は海の魔女
のところに行き、取り引きで声を失
う。それでも人間界を夢見る人魚姫の
表情は、生き生きと軽やかである。ワ
ーグナー風のドラマティックな表現も
見られるなか、王子の結婚式の舞踏会
の場面は美しいワルツで彩られるが、
人魚姫の表情は悲しげである。

第3楽章（苦悩に満ちた表現で、廣大
に）消えゆくような音楽から始まり、
人魚姫の主題が現れる。この主題は変
容され、弦楽器とハープによる美しい
音楽を経て、再び海の主題が現れ、海
底に身を投げた人魚姫が暗示される。
最後は、結婚式の音楽が響いてから、
最弱音で静かに彼方へ消えていく。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラ
リネット、ファゴット3、ホルン6、トランペット3、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、サスペン
デッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、チャイム）、ハープ2、弦五部

んどはマンハイムの宮廷楽長フェリックス・ワインガルトナーに初演を託す。どの楽章も初稿に比べて短めに刈り込んだものの、扱い難さを意識していたのだろう、演奏のための指示や注釈をこまやかに書き送っていたにもかかわらず、これも拒否されてしまう。運悪く重なったワインガルトナーの転勤に加え、マンハイムには1世紀前にモーツァルトが絶賛したような大楽団はもはやなかった、という事情も大きい。

結局どうなったのか。ウィーン大学からの博士号授与（1891年）といった名声にも後押しされ、改定稿の初演は1892年、ウィーンで実現を見る。盛大な拍手のためにすべての楽章の後で作曲者が舞台に顔を出さなくてはならないほどの成功だったという。着手からじつに8年と5か月——死後初演の第9番を除けば、これだけの時間を要した交響曲は他にない。

要するにブルックナーの第8交響曲は、寒村の作曲家が大都市でようやく成功を勝ち取った直後にさらなる歩を進めた野心作であるが、苦難の道をたどった問題作でもある。前作とは隔たった、「後期作品」と呼ぶにふさわしい峻厳さが漂っており、音楽をざっと見渡しただけでもそれは明らかである。慣習に反して第2楽章にスケル

ツォを置いたのは、巨大な第1楽章と荘厳きわまるアダージョとの間が必要だったためだろう。楽器法も目を瞠^{みは}める。初めて完全な3管編成がとられ、ホルンも4本から8本に拡大、第2稿ではハープも加わって豊かな色合いを添えている。本日演奏されるのは、この第2稿である。

ところで作曲家はワインガルトナー（先述）宛の手紙で、自作がスムーズに理解されるべく解説を加えている。これに沿いつつ各楽章を眺めておこう。

第1楽章 弱音のトレモロに乗って主題が徐々に浮かび上がってゆく。ブルックナーならではの開始だ。後半に聴かれる金管では「死の告知」に続いて「あきらめ」が訪れる。

第2楽章 中間部にトリオを挟んだスケルツォ。同じ音型の反復が盛り上がり築く。主人公は「ドイツのミヒェル」というナイーブな男だという。

第3楽章 中間部を2回挟んだ五つの部分からなる。第9番の第3楽章にもつらなる深淵^{しんえん}なアダージョの到達点。

第4楽章 この行進曲には「コサック兵の騎行」と「軍楽」（ロシア皇帝の表敬訪問を踏まえている）だけでなく「死の行進」の意味がある。第8番は、生と死をめぐる魂のドラマでもあるのだ。

楽器編成／フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン8（ワーグナーチューバ持替）、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、ハープ3、弦五部

読響カレッジ



1.29 [金]

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

チャイコフスキー 交響曲 第6番 ロ短調 作品74 〈悲愴〉

作曲：1893年／初演：1893年10月28日、ペテルブルク（現サンクトペテルブルク）／演奏時間：約46分

ロシアと西欧の融合で普遍性獲得

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、ロシア最大の巨匠と称される人気作曲家です。鉱山技師の子としてウラル地方のヴォトキンスクに生まれた彼は、幼少から音楽に熱意を示しながらも、父の意思を汲んでペテルブルクの法律学校に入学。卒業後は法務省に勤務しました。しかし音楽への情熱に押されて、（後の）ペテルブルク音楽院で学び直し、モスクワ音楽院の教師を務めながら作曲を続けます。1875年にピアノ協奏曲第1番、翌76年にバレエ〈白鳥の湖〉を完成。1877年教息子との結婚に失敗し、入水自殺を図りますが、一方で鉄道王の未亡人フォン・メック夫人より多額の年金を受けて作曲に専念できることになり、二人は15年間手紙だけの不思議な関係を保ちました。この頃、交響曲第4番、ヴァイオリン協奏曲等作曲。

その後しばらくは主に西欧で多くの時間を過ごし、1885年再びロシア定住後は、交響曲第5番、バレエ〈くるみ割り人形〉等を発表。指揮活動でも成功を収めました。ところが、交響曲第6番〈悲愴〉初演直後に急死。死の経緯は謎に包まれています。

チャイコフスキーは「西欧派」と呼ばれ、西欧的な手法と民俗的な語法を融合させた普遍性の高い作風で、グローバルな評価を獲得しました。しかしながら大きな魅力を成すのは、やはりロシアの情趣。さらには短調作品の多さと相まってのセンチメンタルなテイストも見逃せません。そして豊富な美旋律、情熱的なロマンスィズム、華麗なオーケストレーションは比類がなく、バレエ音楽、交響曲、協奏曲をはじめとする多くの作品が、各ジャンルの定番曲となっています。

新たな作風で描く死の予感

チャイコフスキー最後の作品にして、古今の交響曲の中でも人気最上位の1曲。それと同時に、通常は快速調で華やかな終楽章が、アダージョ・ラメントーソ（緩やかに、悲しく）で書かれた、4楽章の交響曲としては史上まれな作品です。

1892年末に着想し、1893年に入って本格的に作曲を開始したチャイコフスキーは、「私の最上の作となるだろう」「作曲しながら幾度となく泣いた」等の言葉を手紙で述べつつ、同年8月末に完成。10月28日に自身の指揮で初演し、11月6日に世を去りました。

この経緯や表題と曲調から、本作は「死を予感した音楽」、さらには「死因は自殺」との説が唱えられ、ある学者が1980年に出した「同性愛醜聞の隠匿のため、秘密会議にて自殺を強要された」との見解が、一時定説にもなりかけました。現在は当初言われたコレラ説が主流ながら、真相は謎のままです。

曲は、遅い第4楽章のほか、曲想が激変する第1楽章、5/4拍子の変則的

ワルツの第2楽章、ナポリの舞曲タランテラのリズムを用いて、スケルツォと行進曲を合体させた第3楽章……と全楽章がきわめて個性的。全体に悲愴感が漂い、静寂へと消えていく曲の終わりは人生の最期を想起させますが、見方を変えれば、新機軸を全面に打ち

出した意欲作ともいえるでしょう。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・ノン・トロポ 暗鬱な序奏から、ヴィオラとチェロが奏する第1主題、甘美な第2主題を軸とする主部へ移行。激烈な爆発に始まる展開部を経て、静かに終結し

ます。

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア 優美なワルツですが、2+3拍子の不安定感が暗い影を落とします。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ 細かな動きのスケルツォに始まり、ダイナミックな行進曲となって高揚を続けます。

第4楽章 フィナーレ、アダージョ・ラメントーソ 悲愴感あふれる終曲。中間部の主題は陶酔的でもあります。

